

同時通訳における情報ユニットとしての心的表示

石 塚 浩 之

(受付 2015 年 10 月 29 日)

1. は じ め に

本稿では、同時通訳を可能とする心的プロセスを実際の英日同時通訳記録の観察に基づき考察し、起点テキスト (source text: ST) の理解から目標テキスト (target text: TT) への再表現の橋渡しとなる心的表示の情報ユニットとしての役割を探る。通訳が起点言語を聞き、目標言語を産出する活動である以上、通訳において言語情報の処理が重要であることは言うまでもない。しかし、通訳が二言語のコード変換ではないと主張するならば、その認知処理の明示化にあたり、言語処理以外の部分で行われる処理について具体的に記述せねばならない。本稿では、通訳の認知処理のうち、語彙情報や統語情報などの言語処理とは異なるレベルでの心的表示の操作に注目する。理論的枠組みとしては Funayama (2007), Ishizuka (2012) などで提案された概念的複合体 (conceptual complexes: CC) の考え方を援用する。CC は言語形式と対応付けられた意味ではなく、ディスコース処理の展開に従い、柔軟にその内容を変えるという特徴を持つ。しかし、本稿では CC の様々な特性のうち、CC の流動性には注目せず、ある項目に関連する一連の情報をまとめる機能、すなわち、情報ユニットとしての機能に焦点を当て、この心的表示が同時通訳の認知処理において果たす役割を分析する。

第2節では、本稿に関連する論点を取り上げた先行研究として船山 (2000), 南津 (2002) の論考を取り上げ、本稿の対象と目的を明らかにする。第3節では、CC モデルにおける通訳プロセスの考え方を紹介し、通訳者の構築する心的表示に関し、本稿で扱う範囲を具体化する。第4節では、実際の通訳記録の観察に基づき CC の実態を分析し、情報ユニットとしての CC の機能について考察する。具体的には、CC の保持と対象化、活性状態、情報のパッケージ化について、実際の通訳記録の分析を通じて論じる。第5節では、通訳研究において、本稿の分析から得られる知見について、特に情報ユニットの内容、役割、そして作動記憶理論との関連についてまとめる。最後に、本稿のむすびとして、心的表示の対象化と操作に関し、通訳の認知プロセスのモデルに含むべき論点を整理する。

2. 通訳者による独自の照応関係の構築

同時通訳記録を観察すると、TT に指示表現が使用されているにもかかわらず、ST にはこれに対応する指示表現はないという例が頻繁に見つかる。こうした例は、通訳が ST から TT への記号列の置き換えではなく、TT の産出は独自のテキスト構造の構築であることを示す。英日同時通訳を実際の通訳記録に基づいて分析した研究において、このような現象を取り上げた先行研究としては、船山 (2000)、南津 (2002) が挙げられる。

船山 (2000) は、原発話者と通訳者の構図 (perspective) のとらえ方の違いの表れをいくつかのパタンに分け、そのパタンのひとつとして、通訳者による独自の照応関係の構築を取り上げている。ここでは、こうした現象が通訳者の頭の中の「概念的まとめなおし」を反映するものとする論点があり、すでに後の CC モデル (e.g. Funayama 2007) の提案へと結実する発想が含まれている。南津 (2002) は、船山 (2000) を引き、TT の「そういう」という言語形式に焦点を絞り、この対応情報が ST にない場合に注目する。これは船山 (2000) の問題意識を受け継ぐように見える。その分析には、関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995) を分析装置とし、メタ表示についての言及もある。関連性理論の推論モデルは CC モデルにとっても重要である。しかし、南津 (2002) は、訳出に見られる追加表現の意義を論じるものであり、通訳者の心的表示について論じたものではない。

本稿の目的は、船山 (2000)、南津 (2002) で取り上げられた現象に、再度、光を当て、現在の CC モデルの立場から論点を再整理することである。これにより、同時通訳の認知処理モデルに組み込まれるべき論点として、情報ユニットとしての CC の新たな役割を提示する。

3. 通訳プロセスにおける心的表示

本節では、同時通訳記録の分析に先立ち、本研究の背景となる考え方を紹介する。

一般的に通訳は、ある言語から別の言語への表現の置き換えであると考えられがちである。この素朴なとらえ方を別の言い方で表せば、通訳とは ST から TT への言語的コード変換であるということになる。この場合、言語的コード変換とは、ある言語と他の言語の間に語彙および統語規則の対応関係があるがあることを前提とし、起点言語から目標言語に対応要素の置換を行うということを意味する。ここには、言語表現とそれに対応する思考内容、あるいは伝達内容との間に区別を認める必要はないという前提がある。

本稿では、通訳とは ST から TT へのコード変換ではなく、ST の理解の産物である概念的

複合体（conceptual complexes: CC）を経由し、この内容を表示すべく TT が産出されるという立場をとる（Funayama 2007, Ishizuka 2012 参照）。CC は、発話理解に際し、聞き手が構築する概念の記述装置である。ここでいう概念とは、聞き手の認知環境において活性化された情報の総体であり、言語情報のほか、様々な非言語情報を資源として構築される心的表示である。図 1 は素朴な通訳観と CC モデルの通訳プロセスのとりえ方の違いを模式的に示したものである。

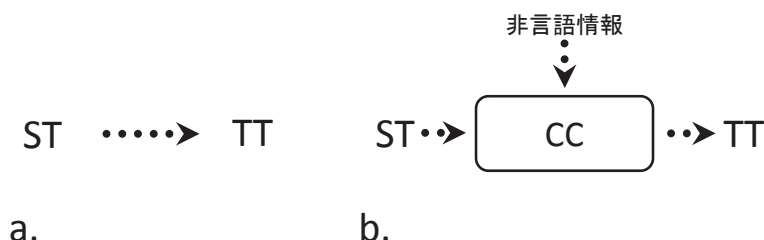


図 1：素朴な通訳観（a）と CC モデル（b）

図 1 において点線の矢印は通訳プロセスにおける情報の流れを示す。(a) は通訳を言語間のコード変換と見なす素朴な通訳観を示す。ここでは ST の言語記号は、コード的規則に基づき、直接的に TT の言語記号に変換される。一方、(b) の CC モデルにおいては、ST の入力から TT の産出の間に CC の構築という段階がある。本稿では CC をこのような風船状の図形で示す。ここに示した通り、CC の情報源は、言語情報と非言語情報の 2 種に大別される。言語情報は、通訳の原発話、すなわち ST によって与えられる。一方、非言語情報の由来は多様であり、Ishizuka (2012: 58) では 7 分類を採用した。本稿ではこれを簡略化し、言語情報、現場情報、背景情報、CC 履歴の 4 分類で議論を進める。図 2 は CC を構成する 4 種の情報の関係を示す。

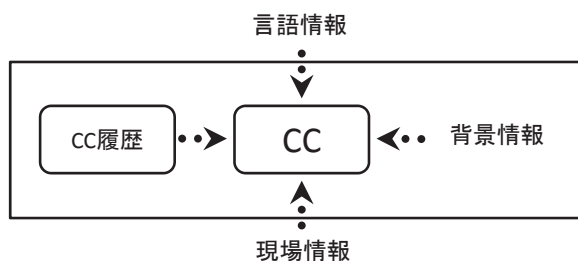


図 2：CC の資源

図 2 において、横長の長方形は原発話の聞き手である通訳者の認知環境の全体を示す。通訳者にとって、外部からの情報は、言語情報と現場情報の 2 種類である。言語情報は ST に

含まれる言語表現として、ディスコースの時系列に沿って与えられる。現場情報は、発話の状況から得られる原発話以外の情報であり、話者の表情・しぐさのほか、現場の風景などの状況、現場にいる原発話者以外の反応、原発話の開始をもたらした状況などが含まれる。また、特に原発話者と通訳の聞き手が頻繁に入れ替わる状況では、その時点での原発話者が誰であるかも重要な情報となる。

一方、既存知識と CC 履歴は、通訳者の認知環境の内部から得られた情報である。既存知識には、通訳者がこの社会で生きていくひとりの個人としてもっている一般的な常識のほか、当該の通訳業務に対応するために準備した知識も含まれ、一括して世界知識あるいは背景知識と呼ぶこともできる。ここには、フレーム (Fillmore 1982/2006)、スキーマ (Langacker 1987)、ICM (Lakoff 1987) などとして言及されてきた構造的な認知資源も含まれる。

もうひとつの内部資源である CC 履歴は、ST の先行部分の理解によって構築された CC である。言い換えれば、CC 履歴とは、ある時点までに聞き手が理解した話の内容である。CC モデルにおいて、ディスコースの理解とは、時系列に沿って順次与えられる言語情報の処理に従って展開する漸進的な意味構築である。聞き手は、話の内容を一挙に理解するのではなく、話の展開の中で徐々に理解する。発話がコミュニケーションの引き金となる場合、ディスコースの冒頭部分では、あらかじめ構築された CC はなく、CC の構築は言語情報を最初の刺激として無から始まる¹。しかし、話の展開の中で理解された内容は、聞き手の頭の中で整理され、後続部分の理解のための助けとなる。すなわち、ディスコースの先行部で構築された CC は後続部の理解のための資源となる。

図 2 を見ると、新たに入力される言語情報を刺激として構築される CC と CC 履歴が独立した心的表示であるという印象を与える。しかし、CC 履歴と新たに構築される CC の関係は単純ではなく、いくつかのパターンがありえる。例えば、言語情報に基づき新たに構築された CC が CC 履歴と融合する場合、CC と CC 履歴は独立しており、図 2 はこの状態のイメージを的確に示したものと見える。しかし、新たに構築された CC が CC 履歴と融合せず、独立性を保つ場合も考えられる。また、ディスコースの中で新たに与えられた言語情報に基づき CC 履歴の絞り込みあるいは拡張が行われる場合、新たな CC は CC 履歴と別に構築されるわけではない。いずれの場合も、CC を情報ユニットして対象化するためには、この CC はあらかじめ聞き手の認知環境に存在する必要がある。したがって、本稿の主題は、CC 履歴の同時通訳プロセスにおける役割にあるとも見える。

同時通訳プロセスにおいては、発話に含まれる語彙の同定や統語規則の適用などの処理も

1 言語はコミュニケーションの唯一の手段ではなく、コミュニケーションのきっかけが常に言語刺激であるとは限らない。非言語刺激でコミュニケーションが始まる場合、言語情報が与えられる前に CC の構築が始まることもありえる。

重要であり、こうした言語情報の処理においては、言語の形式・統語・意味に関する心的表示の操作が関わる。しかし、通訳に関わる心的操作は ST の言語情報の処理のみではなく、これとは異なる水準での操作が関与すると考えられる。本稿では、実際の同時通訳の訳出記録を観察し、同時通訳における CC 履歴のありかたを分析し、通訳者の発話理解および訳出における情報ユニットとしての CC の役割についての論点を整理する。

4. 情報ユニットとしての CC

ここでは、同時通訳記録から言語的操作とは異なる水準での心的表示の操作の証拠となる 3 つの例を取り上げ、CC の保持と対象化、活性状態、情報のパッケージ化について、順に論じる。なお、本稿で使用するデータは、テレビ放送での討論に使用された同時通訳の書き起こしであり、英語の ST と日本語の TT の 2 行併記となっている。上段（E 行）が英語の原発話であり、下段（J 行）が日本語の訳出である。なお、ST と TT の上下の位置関係は、同時通訳における訳出のおおよその時間的対応を表している。

本稿において、シングル引用符付きの語句は、そのように表現可能な情報を含む CC を示し、二重引用符付きの英語表現および鍵括弧で囲んだ日本語表現は実際の発話すなわち通訳記録からの引用を示す。例えば ‘dog’ は dog という語にコード化された辞書的意味ではなく、ある発話の中の “dog” という表現などから構築された CC を指す。また CC の情報は英語で示すが、これは通訳者の認知環境において情報が英語で表示されていることを意味するものではない。本研究においては、CC の情報は起点言語、目標言語のいずれの形式からも離れた状態を基本として想定している。

4.1 CC の保持と対象化

まず、(1) の訳出について TT の「これ」(J058) に注目する。この「これ」(J058) に対応する指示表現は ST に見当たらない。これは船山 (2000)、南津 (2002) で報告された例と同様、通訳者が TT において原発話に見られない照応関係を構築している例にあたる。

(1)

- E 058 [K] So, this fiscal cliff is a severe issue, not only for the US but also for the global economy, and particularly for
J 058 [K] 財政の崖というのは厳しい問題です。これは、アメリカだけではなく、世界経済
- E 059 Europe. If the overall measures of the fiscal cliff as it is enacted now would actually
J 059 全体にとっても、そしてとりわけヨーロッパにとって厳しい問題です。もし、財政の崖に 関する様々

この訳出において、通訳者は“this fiscal cliff is a severe issue” (E058) を「財政の崖というのは厳しい問題です」(J058) と訳出する。文の単位が対応していないことを別にすれば、一見したところ、何の変哲もない訳出であるが、この訳出の「というのは」(J058) には、通訳者が ‘fiscal cliff’ をトピックととらえたことが現れている。この時点で、通訳者は、情報ユニットとしての CC を構築し、これに ‘severe issue’ という属性を与えているのである。

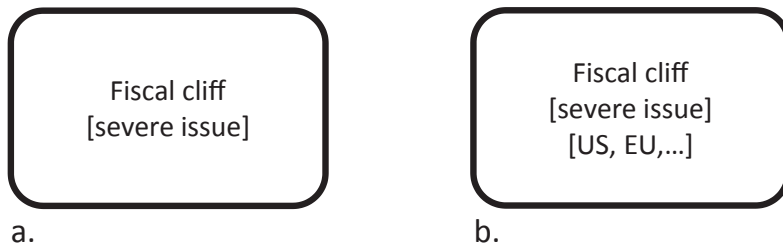


図 3 : 「財政の崖」(J058)

ここで通訳者が構築した CC は図 3 (a) で表せる。[severe issue] の角括弧はこの情報が上位の CC (‘fiscal cliff’) の属性としてとらえられていることを示す。CC の構築は言語処理とは異なるレベルで実行され则认为られる。とはいえ、一般的にコンピュータ文の文法的主語はトピックを表すと考えられ、この訳出のみをもって、通訳者の非言語的処理の証拠と主張することはできない。

次に通訳者は「これは」(J058) と訳出を続けている。TT で「これ」(J058) は「財政の崖」(J058) と照応する。また “a severe issue” (E058) は ST には一度しか現れないが、J058 と J059 の 2 ヶ所で「厳しい問題」と訳出されており、この情報保持も継続していることがわかる。このことから、通訳者は “a severe issue” (E058) でいったん文を切るが、そのことにより、この内容が通訳者の頭から消失したわけではないことがわかる。通訳者はこの訳出に当たり、‘fiscal cliff’ についての CC を保持し続け、CC の全体を保持しつつ、 “not only for the US but also for the global economy” (E058) を、この CC の属性情報として処理している。図 3 (b) はこの CC の状態を示したものである。この場合、CC 履歴が図 3 (a) であり、ここから展開して、新たに構築された CC が図 3 (b) に相当する。

たとえば、TT に現れた it を通訳者が「それ」と訳出するとすれば、これは言語的置換によって処理可能であり、極端に言えば、通訳者が it の指示内容を把握していない場合でも処理できる。しかし、ST に対応要素を持たない TT の指示表現は、通訳者による指示内容の保持を反映するものであり、同時に通訳者がその内容を心的表示として対象化しているこ

とを示す。つまり、通訳者は、ST の情報を処理し、対応する訳出表現を産出した後でも、この情報に対応する CC を保持し続けており、さらにこれに対象化し、TT の指示表現に活用することで、後続部分の訳出を行っているのである。これは ST の語彙情報および統語情報の処理とは異なるレベルの操作である。こうした訳出は同時通訳においてありふれたものである。この分析より、一般的な同時通訳の訳出において言語情報のコード的置換処理とは異なる処理が関与していることが確認できる。

ところで、このように ST の情報を短く区切って処理する訳出は同時通訳の作業制約に対する対処であり、一種の方略ともみなせる。「これ」(J058) は、ST の情報を “this fiscal issue is a severe issue” (E058) まですでに区切り、ここまですでに TT の一文として産出したことにより、次の文を始めるために現れた表現である。こうした訳出の利点として、ST の情報を訳出することで、その情報を忘れることができ、次の情報の処理に注意を集中することができるという説明がなされることがある。これは、同時通訳の経験者であれば誰しも実感することであろう。しかし、この分析で示した通り、通訳者の記憶からは訳出済みの情報が消去されたわけではない。では、同時通訳においてこのように文を短く切ることの利点とは何だろうか。この点については、4.3において詳しく取り上げる。その前に4.2では、CC 履歴に本節の例とは異なるタイプの情報が含まれ、ディスコースの理解においてより積極的な機能を果たす例について論じる。

4.2 CC の活性状態

次の例では引き続き ST に対応表現のない指示表現「それ」(J087) に注目し、CC 履歴の保持と対象化がディスコースの論理構造の把握に貢献している例を分析する。

(2)

E 087 [G] Well, the deficit has protected the United States from much more severe economic problems
J 087 [G] 赤字はアメリカを守ってきたわけです。それがなかったとし

E 088 such as are being already experienced in Europe. I was pleased to see Mr Kleemann take what you might call the
J 088 たならば、もっと深刻な経済問題になっているでしょう。欧州のような状況になっていたと思います

この訳出において、通訳者は “the deficit has protected the United States” (E087) を「赤字はアメリカを守ってきたわけです」(J087) と訳出し、いったん文を閉じる。ここまでは ST の字義的解釈であり、言語的処理による置換のみでも対応可能であるが、この時点での CC の構築は図 4 で表せる。

ここで通訳者は ‘protect’ という事象についての CC を構築している。この事象の参与

者には動作主 (agent) と被動作主 (theme²) の 2 者が関与することは、通訳者の背景情報に含まれる protect という事象についてのフレーム的知識によって得られる。図 5 の [agent] と [theme] は、それぞれこの事象の参与者情報の挿入されるべきスロットを表す。‘deficit’ という財政状態が ‘US’ を守ってきたことの理解はこのように記述できる。

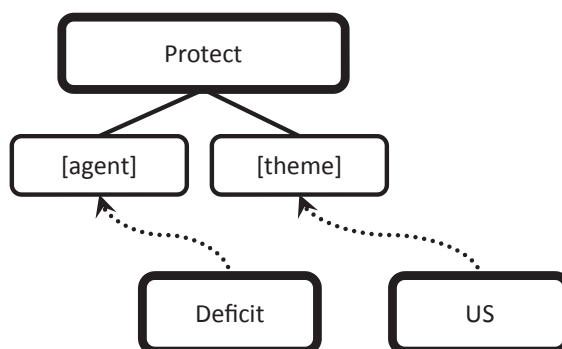


図 4 : 「赤字はアメリカを守ってきた」 (J087)

その後、通訳者は「それ」 (J087) で新たな文を始めるが、これに対応する指示表現は ST に見当たらない。TT の観察からは、「それ」 (J087) の照応表現は「赤字」 (J087) とともに「赤字はアメリカを守ってきた」 (J087) とともに解釈することができそうである。しかし、「それ」 (J087) のみでなく「それがなかったとしたならば」 (J087) という表現全体に着目し、この条件節のもつ対比の機能に注目すると、この訳出は「赤字がアメリカを守ってきた」という事象の保持と深い関わりがあることが理解できる。この表現の背後には「赤字がアメリカを守ってきた」と「深刻な経済問題が生じる」という事象の背反関係の把握がある。すなわち、通訳者はここで二つの事象を含む CC を同時に保持し対比することで、これらの間の背反関係を把握しているのである。ST の情報からこのようなとらえ方をもたらし要素を分析すると、通訳者は “from much more severe economic problems” (E087) に含まれる “from” (E087) を手がかりとして、二つの事象の関係をとらえていると判断できる。

さらに「それがなかったとしたならば」 (J087) という仮定には、「赤字がある」という状況と「赤字がない」という状況の対比の理解が必要であり、これは赤字と黒字を包括する概念としての ‘financial status’ に関するフレーム的知識を活用し、‘deficit’ をその状態の一例として捉えることによって可能となる。図 5 はここでの CC の状態を表す。

図 5 は「それがなかったとしたならば、もっと深刻な経済問題となっている」 (J087) を訳出した時点の CC の状態を示している。ST の “economic problems” (E087) は名詞句で与えられているが、ここでの ‘economic problems’ は、アメリカの「財政黒字」が原因となり、「アメリカ」に対し、「経済問題」がもたらされるという事象を表していることから、この CC も事象として表示されている。図中、‘financial status’ から ‘protect’ へ向かう矢

2 この「被動作主」は patient と表すこともできる。本稿では意味役割の詳細な分類については議論せず、事象一般において、agent 以外の参与者の役割をすべて theme と一括して表す。

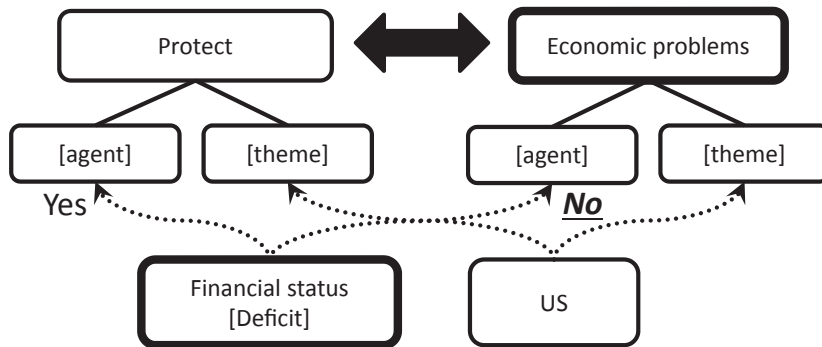


図5：「それがなかったとしたならば」(J087)

印の先には Yes, ‘economic problems’ に向かう矢印の先には No の表記があるが、これは通訳者による ‘deficit’ の有無の把握状態を示す。通訳者は「赤字はアメリカを守ってきたわけです」(J087) を産出した後も、図4で示した CC 履歴を保持しつつ後続ディスコースを処理することにより、‘protect’ と ‘economic problem’ の二つの事象の背反関係を把握している。図5の中央にある両頭矢印は、通訳者の把握した背反関係を示す。

「それがなかったとしたならば」(J087) という訳出の背後には、図5で示した通り、‘protect’ と ‘economic problems’ の二つの事象の対比関係の把握が不可欠であり、この訳出のためには関連する CC のすべての保持が前提となる。一般にあるディスコースに含まれる非明示的な論理関係を把握するためには、そこに含まれる二つの事象（あるいは状況）を同時に管理することが必要である。この訳出に見られる ST に対応表現をもたない指示表現から、通訳者が先行ディスコースの処理によって構築した CC 履歴を保持しつつ、これを対象化することにより、ディスコースの論理関係を把握し、訳出に活用している様子がうかがえる。

ここで CC の活性状態という考え方を導入する。CC に保持されている情報は、そのすべてが常に同様に活性化しているとは限らず、その情報項目により、活性状態の程度を考えることができる。人は自分が考えている内容をすべて言葉に表すわけではないから、聞き手の頭のなかで活性化している情報のすべてを特定することは難しい。しかし、通訳者の訳出を手がかりに心的表示の状態について推定する場合、少なくとも訳出に使用されている情報は十分に活性化されていると考えることができる。そこで、CC の活性状態を考えるうえで、実際の訳出への使用を CC の活性状態の指標とみなすことにする。

すると、この訳出において高度に活性化している情報は ‘financial status’ および ‘economic problems’ ならびにそれらの機能的判断（‘deficit’ の有無、二つの事象の背反関係）のみであると考えられる。図5において、こうした活性状態の違いは、CC の強調表示によって

示されている。通訳者は (2) の訳出のために対立する 2 つの事象を保持しているが、そこに含まれる情報の全てが高度に活性化しているわけではない。作動記憶に含まれる情報量を、認知環境において高度に活性化している CC の量と見なせば、通訳者は保持する CC の全てを作動記憶内で管理しているわけではなく、活性化している情報量を管理しつつディスコースを処理していると考えられる。4.3 では別の例でこの問題についてさらなる検討をおこなう。

4.3 情報のパッケージ化

ここでは、情報ユニットとしての CC の操作が、時系列に沿った同時通訳プロセスにおいて果たす役割を、より明確に観察しうる例を検討する。(3) の「それによって」(J250) の「それ」、「その人たち」(J250) の「その」、「それが新たな新製品に」(J250) の「それ」が、いずれも ST に対応する指示表現を持たない点に注目する。

(3)

E 248 and for automobile engineering and development. I think it's a terrific example. The key word there was

J 248 技術によって、経済発展が 起きるということ、 自動車開発もしかりであります。

E 249 crowdsourcing. Technology facilitates the ability to tap into and create new human capital to

J 249 クラウドソーシングがキーワードでした。 技術によって 可能性が拡大する新しい

E 250 innovate. And new innovators can lead to new products and transform the business model for automobiles today.

J 250 人材がそれによって創出され、その人たちがイノベーションを起こす、それが新たな新製品につながり、

E 251 Clearly Toyota, clearly Ford, clearly General Motors, all automobile companies are now going to think about, hm,

J 251 自動車の製造モデルが様変わりするわけです。トヨタ、フォード、ジェネラルモーターズ、すべての自動

この訳出には、ST と TT の間にさまざまな差異が認められる。まず、「それによって」(J250) は TT の「技術によって」(J249) の言い直しであるが、この繰り返しは ST にはない。「その人たちがイノベーションを起こす」(J250) は “new human capital to innovate. And new innovators” (E249) あたりと対応するが、この部分には ST と TT の間で統語的にかなりの差異が認められる。また、TT の検討からは「その人たち」(J250) は、「技術によって可能性が拡大する新しい人材」(J249) に照応するが、これは TT において独自に構築された照応関係である。さらに「それが新たな新製品につながり」(J250) は、“All new innovators can lead to new products” (E250) との対応が認められ、「それ」(J250) は、ST との関係でみると人間を表す “All new innovators” (E250) と対応するように見えるが、TT の内部では事象

を表す「その人たちがイノベーションを起こす」(J250)と照応しており、STとTTのテキスト構造には差異が認められる。

この訳出の背後にあるCCの展開を考えるため、‘technology’、‘human capital’、‘innovation’、‘new products’、‘business model’の5つの要素に注目して議論を進める。これらの5つの要素は、それぞれ「技術」(J249)、「人材」(J250)、「イノベーション」(J250)、「新製品」(J250)、「製造モデル」(J251)と訳出されている。特に‘innovation’は“innovate”(E250)に対応するが、「その人たちがイノベーションを起こす」(J250)という訳出には「イノベーション」を名詞として使うことにより、entityとして対象化するとらえ方が現れていることから、この要素もこのディスコースにおいて示された一連の事象の参加者のひとつとして考える。

ここで、(3)の訳出から、この通訳者がこれらの5つの要素の因果関係をどのようにとらえていたかを分析する。ここでは、Croft (1991)、Talmy (2000)などが動詞の意味分析に用いた因果連鎖(causal chain)の考え方を援用し、ディスコース処理においてとらえられた事象参加者間の関係の記述として応用する(Ishizuka 2012: 93)。図6は(3)の訳出をもとに5つの要素の関係を示したものである。



図6：通訳者のとらえた因果連鎖

図中のCCは、通訳者によって因果連鎖における参加者としてとらえられた5つの要素を表し、実線の矢印は参加者間に働く力の方向を示す。この力を参加者の関わる事象として現れるものととらえれば、矢印は事象の省略表示とみなしてもよい。すなわち、矢印の根元には事象のagentが位置し、先端にはthemeが置かれ、ある事象のthemeが次の事象のagentとなることで因果連鎖をなしている。

ところで、図6の因果連鎖は(3)のディスコース処理において、一挙にとらえられたものではなく、同時通訳の時系列に沿った処理において漸進的に構築されたものである。これを参加者の関係のみに注目して考察すると、通訳者のCC構築は図7のPhase 1からPhase 4へと進んだものと説明できそうである。しかし、この考え方は妥当であろうか。

この場合、因果連鎖は新たな参加者が加わるごとに拡大し、最終的に5つの参加者のすべてが同時に把握されねばならないことになる。同時通訳における作動記憶による制約(水野2015)を考慮すると、この心的プロセスの実行は困難である。それでは、通訳者はこの因果

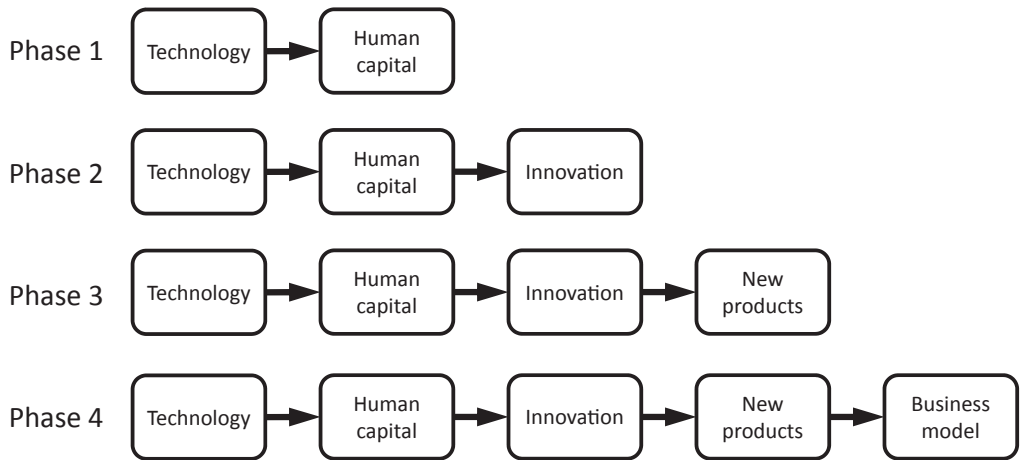


図 7：作動記憶への負荷の高い CC 構築

連鎖をどのような形で保持していたと考えるべきであろうか。この例の TT に現れた指示表現に注目することにより，作動記憶への負担の少ない CC の操作の一面について分析することができる。図 8 は (3) における指示表現の使用から推定した CC の展開を示したものである。

「技術によって」(J249) と「それによって」(J250) の繰り返しは，情報の保持というよりは，ほぼ同時に作動記憶内にあった情報が 2 回訳出されたものとみなすべきであり，むしろ同時に作動記憶内部に格納しうる情報の量についての示唆を与えるものかもしれない。ここでの議論では，「技術によって，可能性が拡大する新しい人材がそれによって創出され」(J249) という訳出において，‘technology’ と ‘human capital’ との因果関係が把握されたことのみを確認する。

続いて「その人たちがイノベーションを起こす」(J250) の「その人たち」(J250) をもたらした

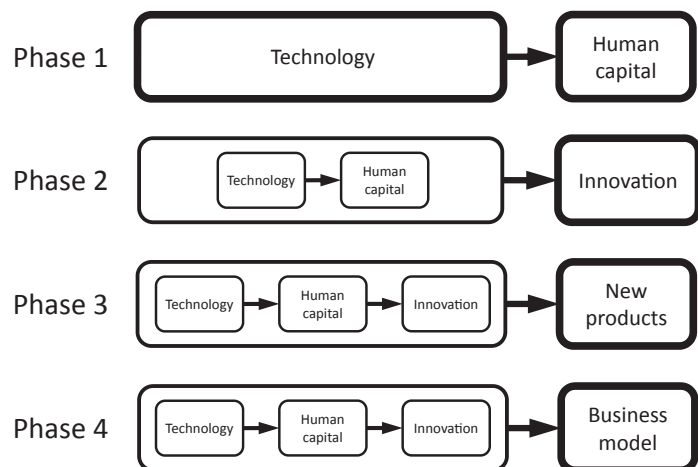


図 8：作動記憶への負荷の低い CC 構築

CC は、Phase 1 における ‘human capital’ そのものではなく、「技術によって創出された人材」、つまり Phase 1 の構図全体のなかに現れた「人たち」であろう。ここでの「その人たち」は Phase 1 の構図全体を明示化せずに一括して指示する機能がある。直接的に TT から観察しうるのは、あくまでも言語表現上の機能であるが、言語表現を人間の認知能力を探索するための手がかりとしてみなせば、ここでの指示表現は情報ユニットとしての CC が Phase 1 の事象全体をパッケージ化する機能を持つことの反映であると考えることができる。

つまり、通訳者は、Phase 1 の事象を指示表現により示すことにより、CC 履歴に含まれる情報の全体を活性化せずに、CC 履歴を対象化し、後続ディスコースの処理に活用することができるのである。図 8 において、Phase 2 の始点となる CC にはパッケージ化された Phase 1 の事象全体が描かれている。

CC は言語形式から自由な概念である。言語形式とそこに結び付いた意味をすべて保持せねばならないとすれば、記憶容量への負担がかなり大きくなる。しかし、情報を言語形式から解放し、CC として保持することにより、記憶容量への負荷を軽減することができるのである。

この論理で分析を進めると、「それが新たな新製品につながり」(J250) の「それ」(J250) は、単に ‘innovation’ ではなく、Phase 2 で示された事象の全体を示すことになり、図 8 において、Phase 3 の因果連鎖の始点には Phase 2 で把握した因果連鎖の全体がパッケージ化されて示されている。さらに「自動車の製造モデルが様変わりする」(J251) は、「それが新たな新製品につながり」(J250) との並列表現であるから、Phase 4 の因果連鎖の始点は Phase 3 と同じでかまわない。別の解釈をすれば、Phase 4 の始点は Phase 3 の因果連鎖全体である可能性もあり、その場合、Phase 4 の始点に含まれるべき参加者は、図 8 に示した 3 者ではなく、図 7 の Phase 3 に示した 4 者であることになるが、いずれの場合も、ここでの CC のパッケージ化に関する議論には影響を及ぼさない。

ST に対応要素を持たない指示詞を多用したこの訳出は、そうでない場合と比べて作動記憶の節約になるのだろうか。指示詞を使用しない仮想訳と比較することで検討してみよう。

(4)

- a. 技術によって可能性が拡大する新しい人材がそれによって創出され、その人たちがイノベーションを起こす、それが新たな新製品につながり、自動車の製造モデルが様変わりする。
- b. 技術によって創出された、可能性を拡大する新しい人材により起こされたイノベーションが、新たな新製品につながり、自動車の製造モデルが様変わりする。

(4a) は (3) で示した TT の一部であり、ここで問題としている 5 つの参加者が訳出された部分である。この訳出では、短い節が連続し、後続する節では先行する節の情報が指示表

現によって示されている。これに対し、(4b) は (4a) と同じ情報を、指示表現を使用せず、ひとつの節で表現した仮想訳である。語順はほぼ同じであり、ST と TT の同時性という点に関しては、(4a) が可能であれば (4b) も可能である。「創出され」の位置は移動したが、これは ST の語順に近く、(4b) のほうが有利に思える。しかし、(4b) においては、「技術によって創出された、可能性を拡大する新しい人材により起こされたイノベーション」が主語となっており、この情報を把握するためには図 7 の Phase 2 の構築が必要である。これを「新たな新製品につながり」と合わせてとらえようとする Phase 3 に示された 4 者を同時に保持することが必要となる。一方、(4a) は、図 8 に示した通り、通訳者の保持する情報ユニットは常に二つで済み、ほぼ一定の作動記憶容量で対処できる。

これに関しては、情報構造 (Halliday & Hassan 1976) と情報の活性状態 (Chafe 1994) という観点からの説明も有意義である。指示表現によって示される情報は旧情報であり、認知環境における活性度が低いとすれば、「その人たちがイノベーションを起こす」(J250) という訳出時点において、‘innovation’ は新情報であり活性度が高い。同様に「それが新たな新製品につながり」(J250) における新情報は ‘new products’ であり、活性とは高い。さらに「自動車の製造モデルが様変わりする」(J251) では、「それが」という指示詞すら省略されており、旧情報の活性状態はさらに低下しているとみなせる。図 8 には、こうした情報の活性状態も CC の強調・非強調によって示している。

指示表現の使用は、同じ情報の訳出の繰り返しにつながり、訳出に使用する語数の増大につながる。同時通訳の時間的制約を考慮すれば、訳出語数をできるだけ少なく抑えるほうが有利と思われる。にもかかわらず、同時通訳において ST にはない指示表現が使用されるひとつの理由としては、CC のパッケージ化により、作動記憶内部の情報量を制御できるためと説明できる。このように、ディスコース処理に必要な作動記憶の理論に、単にディスコースに含まれる言語表現の語数などだけではなく、心的表示とその活性状態という論点を含むことで、通訳プロセスについてのより精密な分析が可能となる。

5. 考 察

通訳者は、情報ユニットとしての CC を保持し、対象化することで、非言語的なレベルでの認知処理を実行しながら、時系列に沿ったディスコース処理を実行する。これは通訳記録に現れた言語的特徴、すなわち、ST に対応要素のない TT の指示表現から分析することができる。ここでは、本稿から得られた知見と、残された課題についてまとめる。

5.1 情報ユニットの内容

ST に対応する要素がないにも関わらず TT に現れた指示表現は、それ自体が、通訳者による CC の対象化とみなすことができ、通訳記録のわずかな断片からでも、時系列に沿ったディスコース処理において情報ユニットとしての CC が果たす役割を伺うことができる。本稿で見たとおり、CC の保持・対象化・パッケージ化は、様々なタイプの CC に対して可能である。

一見したところ、本稿で取り上げた例は、南津（2002）の（おおむね）言語形式に基づく区別において、「名詞句を指す『そういう』」と「命題を指す『そういう』」に類比することができそうである。しかし、CC の区別としては、それが TT のどのような言語形式と結び付いているかよりは、それがどのような種類の情報を含むかに注目すべきである。なぜなら、CC は言語形式とは離れた概念の記述装置であり、含まれている情報が同じであっても、さまざまな言語形式と結び付くことが可能だからである。したがって、本稿では CC の区別としては、TT における言語形式ではなく、通訳者の心的表示のタイプによる区別として、CC が事象を含む場合と含まない場合という分類を採用したい。

これは船山（2006）における CC の分類、すなわち EVENT, PROPERTY の区別に対応する。この分類は、動詞の意味を事象記述と属性記述に分類する伝統から発想したものである可能性はあるが、CC は言語形式から離れた心的表示であり、動詞に相当する情報の有無や性質と CC のタイプは必ずしも一致するとは限らない。CC の内容は、事象参与者としてとらえられることもあれば、情報のまとまりが事象を表すこともあり、複数の事象を含む論理がひとまとめの CC を構成することもある。

また船山（2006）はもうひとつのタイプとして unspecified を想定している。CC には、あるトピックに関し、事象とも属性ともつかない情報のみを含む場合もある。あるいは、トピックすら判然としない流動的な情報や抽象的な情報しか含まない場合、たとえば、気分や気配のようなものしか含まない CC も想定しうる。そして、そのような曖昧な内容しか含まない CC ですら、話し手がその情報を指示する場合には、これを対象化し、「あれ」や「これ」という語で示すことができる。ST に対応要素のない TT の指示表現も、そのようなさまざまな情報ユニットとしての CC を対象化して使用されることがあると予測できる。

5.2 情報ユニットとしての CC の役割

同時通訳における情報ユニットとしての CC には、ST の理解と TT の産出の両面での働きがあると考えられる。本稿では、その全体を網羅的に示すことはできないが、本稿の分析から示唆される CC の機能をこの 2 つの面からまとめる。

a. ST の理解における役割

CC は漸進的なディスコース処理における心的表示の記述装置であり、CC の構築は発話理解の産物であるが、CC の保持と対象化は、本稿の分析で見たように、ディスコースの非明示的論理の把握において積極的役割を果たす。論理関係は二つの命題の間の関係であり、これは二つの CC を同時に保持することにより可能となる。原発話の聞き手としての通訳者は情報ユニットとしての CC を利用してディスコースの構造を把握している。

b. TT の産出における役割

同時通訳者は CC を利用して訳出を行う。通訳者は、同時通訳の同時性を確保するため、ST の文を最後まで聞かずに訳出をはじめ、短文の分割で TT を構成する場合がある。訳文の分割には、日本語と英語の間の統語的違いを乗り越えるためという側面もあるが、情報ユニットとしての CC によるパッケージ化には、通訳者の作業記憶容量を制御しつつ、ディスコースの処理を支えるという機能があり、これは同時通訳におけるオンライン処理を可能とする仕組みとなっている。

通訳プロセスには、大きく分けて ST の理解と TT の産出の 2 つの段階がある。CC モデルは発話理解の認知プロセスの記述装置であるが、本稿の分析で示したように、通訳者の TT 産出についても、一定の分析が可能である。

5.3 作動記憶モデルとの整合性

CC はディスコース処理において漸進的に構築される。そのため、ディスコースの処理が進むと、CC の情報が巨大になるのではないかという疑問もある。しかし、CC のパッケージ化により、活性情報の総量を管理することが可能となっていると想定できる。

本稿で見た ST に対応表現を持たない TT の指示表現は、通訳者が ST の文の途中で訳出を始め、TT の文を短く分割する際に生じやすいことがうかがえる。CC で情報をパッケージ化したり、情報を作動記憶容量内に収めたりといった心的操作は、意識的に管理できる作業ではないだろう。それに比べれば、訳出を短い文に切るというのは、意識的に実行しやすい方略である。本稿の発想でさらなる理論化と検証を進めることによって、同時通訳において、短く文を切るという方略に理論的根拠を与えることができる。

水野 (2015) で指摘されたとおり、CC モデルにおいてはこれまで記憶の問題が本格的に論じられることがなかった。しかし、本稿の議論は、そのことが CC モデルにとって本質的な欠陥ではなく、むしろ CC は作動記憶の問題を考える上でも有用な記述装置となり得ることを示唆するものである。今後の理論化によって、記憶モデルを取り込み、CC モデルによ

る同時通訳プロセスの記述はより充実したものとなると期待できる。

6. む す び

本稿では、情報ユニットとしての心的表示の役割を検討し、CCの対象化、それによるディスコースの非明示的論理の把握に加え、作動記憶の節約といったCCの機能について考察した。これは通訳記録の観察結果をCCモデルによって記述した結果から得られた提案であり、既存の記憶モデルとの関係などの詳細な検討は、これからの課題である。

本稿ではごく限られた例についてしか論じることができなかった。しかし、本稿で示した例は特殊なものではなく、同時通訳においてありふれたものであり、類似の例はわずかなデータからでも多数見つけることができる。このことは、本稿の分析が妥当であることを示すものであるといえる。またここで得られた知見は、人が言葉を理解し産出する能力についての示唆を多く含むものでもある。

【使用データ】

本研究で使用した通訳記録はNHK-BS1「Global Debate WISDOM『アメリカよ どこへ行く』」(2012年11月17日放送)より採録した。

参 考 文 献

- Chafe, W. (1994) *Discourse, consciousness, and time: The flow and displacement of conscious expression in speaking and writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: the Cognitive Organization of Information*, Chicago: University of Chicago Press.
- Fillmore, C. J. (1982/2006) Frame semantics. In D. Geeraerts (Ed.), *Cognitive Linguistics: Basic Readings* (pp. 373–399). Berlin: Mouton de Gruyter. (Reprinted from *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111–137, by Linguistic Society of Korea (Ed.), 1982, Hanshin Publishing Company, Seoul)
- 船山仲他. (2000) 「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」宮畑一範 (編) 『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証』(平成10–11年度文部省科学研究費報告書基盤研究 (C) (2) 10610518) 3–26. 大阪府立大学
- 船山仲他. (2006) 「発話理解のオンライン概念表示」『外大論叢』57, 1–22. 神戸市外国語大学
- Funayama, C. (2007) Enhancing mental process in simultaneous interpreting training. *The Interpreter and Translator Trainer*, 1 (1), 97–116.
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Ishizuka, H. (2012) *Conceptual processing in English-japanese simultaneous interpreting*. PhD dissertation, Kobe City University of Foreign Studies.
- 水野的. (2015) 『同時通訳の理論 認知的制約と訳出方略』朝日出版社
- 南津佳広. (2002) 「同時通訳における照応関係の構築：指示表現「そういう」をてがかりに——認知語用論的観点からの統一的説明」『通訳研究』第2号, 43–62.
- Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press.

- Langacker, R. W. (1987) *Foundation of cognitive grammar: Volume I theoretical prerequisites*. Stanford University Press.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed.). Oxford: Blackwell. (First edition published in 1986.)
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics, vol. 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.

SUMMARY

Mental representations as information units during simultaneous interpreting

Hiroyuki Ishizuka

This study analyses a recorded simultaneous interpreting performance to explore the status of mental representations constructed by a simultaneous interpreter, drawing on the model of conceptual complexes (the CC model) (e.g. Funayama 2007, Ishizuka 2012). A CC is a descriptive device of the hearer's mental operations during the incremental process of discourse processing. As a hearer of the source speaker, the interpreter constructs CCs as non-linguistic representations. CCs are involved in two stages of the interpreting process: comprehension of the source text (ST) and production of the target text (TT). This study focuses on referential expressions in the TT that have no corresponding expressions in the ST. This type of translation in interpreting performances reveals that interpreting is not simply code switching from ST to TT, but a process that entails non-linguistic cognitive operations. Based on such clues, the role of CCs as information units is examined. The study analyses the retention, objectification and activation status of CCs, and their function of information packaging. The functions of CCs are identified in two stages of the interpreting process: in comprehending the ST, they help interpreters understand the implicit logic of the discourse; in producing the TT, they help the interpreters control the capacity of their working memory. The data analysed in the study is the simultaneous interpreting transcript (English to Japanese) of a Japanese TV programme. The juxtaposition of source and target text reflects the temporal correspondence between the source speaker's utterance and the interpreter's production.